

1-5 スtringスの楽譜の 読み方・書き方と奏法

楽器名の表記、略記について

楽譜上に記載する各楽器の正式表記と略記は以下のとおり。
スコア 1 段目には正式表記を、2 段目以降は略記で記載するのが一般的。

| 楽器名 | 正式表記 | 略記 |
|-----------------|-------------------------|------------|
| ヴァイオリン | Violin | Vln. / Vn. |
| ヴィオラ | Viola | Vla. / Va. |
| チェロ | Violoncello | Vlc. / Vc. |
| コントラバス / ダブルベース | Contrabass / Doublebass | Cb. / DB. |

楽器名の表記、略記について

Strings Prospero M02

1 段目は正式表記 $\text{♩} = 140$ 2 3 4 5 6 7 8 稲毛 謙介

Violin I
Violin II
Viola
Violoncello

2 段目以降は略記 1A 3 12 13 14 15 16

Vln. I
Vln. II
Vla.
Vc.

V.S.

©2020 TEMPEST STUDIO Co., Ltd.

音部記号

各楽器の音部記号は以下のとおりで、全て実音で表記する。

| 楽器名 | 音部記号の種類 | 記号の表記 |
|--------------------|-----------------------|---|
| ヴァイオリン | ト音記号 |  |
| ヴィオラ | アルト記号 |  |
| チェロ | ヘ音記号 / テノール記号 |  |
| コントラバス / ダブルベース | ヘ音記号 (実音は表記の1oct下) |  |

音部記号

Strings Score Sample

The image displays a musical score for a string ensemble, consisting of five staves: Violin I, Violin II, Viola, Violoncello, and Doublebass. Each staff begins with a treble clef for Violin I and II, and a bass clef for Viola, Violoncello, and Doublebass. The music is written in a single system, featuring a melodic line in the Violin I part that is mirrored in the other parts. The dynamics are marked as *mf* (mezzo-forte) for all parts. The score includes a first measure with a half note and a second measure with a half note, both connected by a slur. The second measure is followed by a fermata. The score concludes with a double bar line. Below the staves, there are performance markings, including a hairpin crescendo leading to a fermata, and a hairpin decrescendo leading to a final fermata.

ストリングスの主な奏法① – Long Note編 –

1)レガート・スラー



フレーズ内を切れ目なく演奏する。

原則、スラーで括られたフレーズはひと弓で演奏しなければならないため、必要以上に長いスラーを使うことは不可能。

現実的に演奏可能なフレージングを考慮して適度に分割することが望ましい。

3)トレモロ



弦にあてがった弓を小刻みに動かして演奏するテクニック。

通常のランダムなトレモロの他に、特定の音価を指定することも可能。

緊迫感のある独特のサウンドが得られるが、特に低音楽器のそれはゴソゴソとした摩擦音を多く含み迫力がある。

2)ポルタメント



指定した2音間の音程を滑らかにつなげて演奏するテクニック。

基本的に同一弦上での跳躍進行の際に用いることができる。(或は演奏の際に必然的に起こることもある。)

非常に甘美なサウンドが得られるが、多用は禁物。

4)トリル



他の楽器同様、指定した音程と短2度または長2度上の音程を交互に素早く演奏するテクニック

基本的な考え方は他の楽器と同様だが、ストリングスの場合は複数人で演奏するため、結果的に2つの音が同時に響いているようなサウンドになることを考慮しておきたい。

ストリングスの主な奏法② – Short Note編 –

1) スピッカート



弦と弓の弾力を利用して、弓を自然の力で弾ませながら演奏するスタッカート。

ある程度細かいパッセージも演奏可能。

弓で弦を叩くようにして演奏する「saltando」と呼ばれるテクニックもあり、状況に応じて使い分けると良い。

2) マルカート



ひとつひとつの音をはっきりと演奏する奏法。

記号で表記する場合もあるが、「marcato」または「marc.」と表記することも多い。

3) ピチカート



弓を用いず、指で弦をはじくテクニック。

高音楽器ではあまり余韻がなく、スタッカート程度の音価しか実現できないが、低音楽器の場合（特に解放弦）は余韻が長いので、全音符程度までなら演奏可能。

弓の持ち替えに時間がかかることを考慮すべし。

4) バルトークピチカート



弦を親指と人差し指ではさみ、激しく指板に弾きつけるテクニック。

「ビシッ」という激しい音を得られ、特に低音楽器では著しい効果が得られるが、高価な楽器が痛んでしまうため、プレイヤーはあまり演奏したがる点も考慮しておきたい。

ストリングスの主な奏法③ - その他 -

1) 重音奏

- ダブル・ストップ (2音の重音)
- トリプル・ストップ (3音の重音)
- クオドール・ストップ (4音の重音)

2) 特殊奏法系

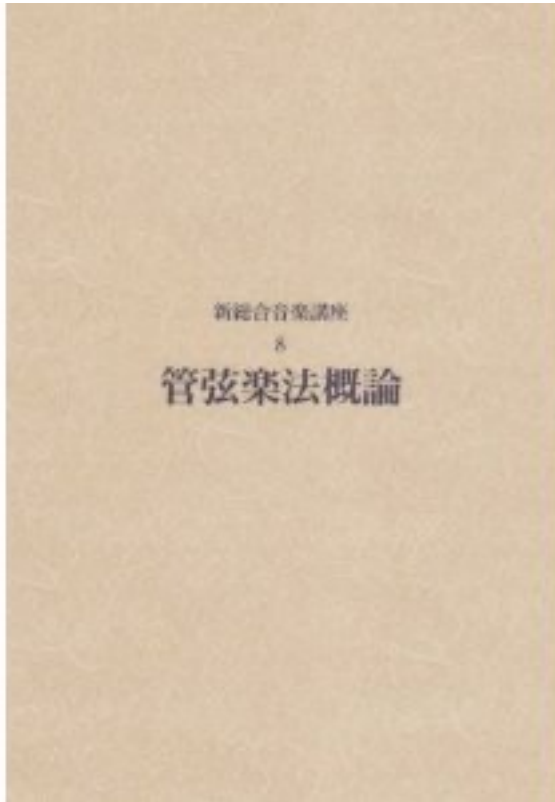
- ハーモニクス (倍音奏、別名フラジオ)
- コン・ソルディーノ (弱音器を付けた演奏)
- コル・レーニョ (弓の毛の部分ではなく、背の部分を使った演奏)

3) 音色の指定

- スル・タスト (弓を通常より指板に近づけて演奏する。柔らかい音色)
- スル・ポンティチェット (弓を通常より駒に近づけて演奏する。硬い音色)

※これらの奏法はポップスではあまり使用することはありませんが、知識として覚えておいてください。

参考図書



「新総合音楽講座8 管弦楽法概論」 (ヤマハ)

今回解説したストリングスの楽器編成、各楽器の音域や特徴、奏法を学ぶのに効果的。

管弦楽法の理論書の中でも比較的わかりやすく、初心者でも読みやすい。

定価 本体1690円＋税